

Title	洛星高校生の印象
Author(s)	栗栖, 大司
Citation	臨床哲学のメチエ. 2006, 15, p. 34-37
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/4651">https://hdl.handle.net/11094/4651</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 洛星高校生の印象

### 洛星高等学校 社会科非常勤講師

栗栖 大司

2005年度で、洛星中学高等学校の講師6年目となりました。初めて教壇に立ったのが1999年、翌年1年間のブランクがありました。2001年度に復活(?)しまして今に至っております。初年度の99年当時は、修士課程の「3」年目を送っており、ある意味で背水の陣でした。臨床哲学研究室の試みはもちろん理解していたつもりですが、現場に居合わせつつ論文を書くという観点からみると、甚だ不真面目な生徒であったと反省しております。

さて、この場を借りまして、この六年間で受けました洛星高校生の印象について記したく思います。大学、大学院時代を通じ塾講師として場慣れしているつもりでしたが、さすがと言うべきでしょうかやはりと言うべきでしょうか、かなりのプレッシャーでした。初年度は高2生の倫理を週1時間を担当いたしました。生徒達がどこかで私を見下している、あるいは値踏みしていると感じました。これはしかし、悪い意味ではありません。教師にまでくっついてかかるプライドの高さや知的な矜持は、それが秘められ鬱屈したものでないならば、教師にとってはありがた

いものだと感じました。ともすると先生と呼ばれてふんぞり返ってしまいがちな私にとって、彼らの批判的な眼差しは、教壇に立ってある種心地よいものがありました。私の出身校では、それほどの進学校ではないのですが、考えられないことでした。高校時代の私は天狗鼻で、友人と教師批判をすることももちろんありましたが、どこかで鬱屈しねじ曲がっていたような気がします。初年度の生徒達が私に対峙する姿勢は、ある意味であっけらかんとして大っぴらでした。「先生の〇〇解釈は間違っている」と指摘されま。す。なにおお、そんなはずはない……よ。簡単すぎて刺激がないのか、あるいは受験で必要だとたかをくくっているのか、突っ伏して寝ていたり文学全集や英語の本などを読んでいたり(没収しにくいのです、漫画やゲームならば全く「楽」なのですが)。くそお、俺様の授業を聞かないとは何たる不埒……だと思ふよ。ただし、受験には関係ないという態度の取り方は、高校2年生あたりではありがちなことかもしれません。高2の初め頃は、受験もまだまだ先であるため動因に欠け、受験のみを視野に入れた場合、中だるみの時期になりがちと考えます。また、倫理という教科が受験に直結しないだろうと勝手に判断した生徒は、単位さえもらえればいい、という態度で授業に臨むことになりましょう。閑話休題、教師を無批判に偉いものとするのは過ちであると思いつつも、おい、ちょっとは

尊敬してくれよ、起きてくれよ、俺も頑張ってるんだからさ、と内心思っておりました。もちろん、彼らを「起こす」には、それなりの裏打ちと熱意が必要であることは理解していましたので、こちらもかなり熱く、いや暑苦しく授業を展開してまいりました。知的な興味関心を持ち、ある程度意識の高い生徒には、彼ら自身のプライドをくすぐる努力をしました。意図的に同音異義語のある漢語表現や少々難解な表現を用い、生徒の不安な表情を確認した直後、別の単語や和語に言い換えてみたり、あるいは他教科の知識を披瀝してみたりと、それなりに工夫しました。ある生徒は「人口に膾炙する」という単語を授業中に、しかも口頭で使うとは渋いね、と喜んでくれました。「公民(倫理)の授業でイオン化傾向の話が聞けるとは」とも言ってくれました。また、受験に無関係だと浅はかにも判断している生徒には、実は受験に直結しているということを強くアピールするという戦略をとりました。どうやら初年度担当した高校2年生には、このスタイルがうまく適合したのではないかと考えております。その後1年のブランクを経て、2001年度と2002年度は高2生を週1時間、高3生を週3時間担当いたしました。初年度の教訓から学んだ対処法は、一定の効果を発揮したと信じます。最も活発に質問が出て来たのがこの時期でした。

2003年度より、倫理がそれまでの高2生

から高1生配当となり、中学を卒業したての生徒達に講義をすることとなりました。予想はある程度していたのですが、高2と高1の1年間では、語彙量や解積力が圧倒的に違うのです。もちろん、中には、中学時代から哲学書を読み解く生徒もいたようですが、総じて素直に授業を受けるという印象が強い学年でした。これは、受験に要る要らないという、ある意味浅はかな判断が働かず、興味を持って聴いてくれているように映り、壇上で喋りまくる私にとっては大変気楽でした。高1生は、これまでの高2生とは異なって、まだまだ語彙量が少ないため、思想を批判するツールが整っていないのだろうと考えておりました。あるいは、批判精神もさほど強くなく素直だから、あまり反撥がないのだな、と感じておりました。私自身が落としか穴にはまっていたと言えるでしょう。実はこのころに至って、生徒の反応や反論を、予め封殺するような授業構成をしておりました。例えば、プラトンに反論したいかもしれないが、その方は、次のアリストテレスを聴いてから判断して下さい、あるいは、皆さんの先輩は、こんな風にアイデア論に反撥してくれましたよ、などと申しておりました。生徒の視線から発する疑問や反論を、きちんとすくい上げるべきだったのですが、その努力を怠っていたと考えております。いみじくも2003年度の高1生が、考査の余白に設けた授業感想欄で「先生の授業を受けると、先生の目を通

した哲学史解釈しかできなくなる」と書いてくれました。痛烈な批判でした。言い訳はあります。指導要領に示された内容を全く無視するわけにはいかず、受験で倫理を選択する可能性がある以上、通史的理解を提示するためにはまとまった時間が必要であること、あるいは、生徒数45名で教壇付きの教室というシステムでは、講義調になるのは致し方ない、等々。もちろん、これは言い訳です。また、ある生徒は「クリスト教」信者の一人ですと告白してくれました。教師冥利に尽きると言えるかもしれませんが、「まずい」と感じたのが本音です。二人には「栗栖という劇場のイドラを是非破壊して下さいね」と逃げるのが精一杯でした。壇上で喋りまくる快感に溺れ、生徒の意見を汲み取る余裕を失っていたと強く反省させられました。ひょっとすると私は、生徒の表現欲求を全く無視し、自分の解釈を一方的に押しつけているのではないか、という疑念を強く持ちました。もちろん、哲学に

対する高度なセンサと批判精神を持った生徒が数人おり、授業が終わった後で自身の考えを披瀝してくれるのですが、彼らの問いや考察を授業へと昇華させることができておりませんでした。またもや言い訳になりますが、高1生の初め頃は、総じて語彙が豊富ではなく、抽象的概念操作を学ぶ過渡期であると言えましょう。したがって、高1の授業では、世界を切り取る「言葉」というツールを提示し、いずれは使えるようになることが眼目だ、と繰り返してきました。ただし、提示したのみで、自分で具体的に使ってみようところまでは、授業でフォローできませんでした。

この点について、内心忸怩たる思いが募っておりまして。45人対1人という図式のま



までは、自分の意見をしっかりと述べ、また相手の意見をじっくり聞くという時間は、なかなか持てないだろうと思っておりました。もちろん、45人対1人という図式にこだわらねばならぬ必然性はないのですが、時間的制約や評価の難しさという観点から、及び腰になっていたのも事実です。哲学に対し、知的な欲求や興味関心を持っている生徒達にとっては、中途半端で煮え切らない授業だったかもしれません。そんな授業であるにもかかわらず、授業中に感じる熱い眼差しと期待に、何とかして応えたいという気持ちがありました。ならば、臨床哲学研究室の皆さんに、私の非力と怠惰によって叶わなかったことを是非お願いしたい、と考えた次第です。皆さんなら、私とは違い、ある程度出来上がってしまっている教師—生徒関係に取りこまれにくいだろうと思いました。また高2生というのが、これまで担当した体験からしてもよい時期だろうと考えました。ちょうど土曜日が比較的自由に使えるそうであることも幸いし、研究室と学校教育部の双方に打診しましたところ、快く承諾してもらえました。私の思惑も含めた三方が、丸く収まったのではないかと愚考しております。

さて、本年度実施の「哲学」講座の感想については、生徒からの感想を読んでいただくことにしましょう。最後に、前年度「哲学入門」に参加した数名の生徒から、直に聞いた意見を記します。総じて楽しかったと言っ

てくれましたが、人数が多かったことと、時間が短かったことがやはり不満だったようです。選択制ですので、哲学に興味や関心があって積極的に選んでくれたようです。本年度春、高3倫理選択者用で、授業フォローのための掲示板をネット上に設置いたしました。この掲示板に、去年の「哲学入門」選択者(しかし倫理は選択しなかった、あるいは受験大学の制約から選択できなかった生徒)が数名紛れ込んで、哲学的や倫理的な議論を振ってきました。私にとって心地よい空間であり、こうやってフォローができるかもしれないと考えました。その折、高3になって本講座が選択できないことを残念に思っている由も承りました。彼らのニーズにどのように答え、展開していくかは今後の課題であり、私自身としては、何とかして授業や掲示板などのやりとりへと昇華したいと考えております。

(くりすひろし)